

万葉集と漢文

私が受験生の頃は、大学入試の国語は結局古文・漢文の出来で決まる、などと言われていました。真偽のほどは定かではありませんが、古語辞典とにらめっこしながら、うんうんと唸って入試問題の過去問と格闘したことだけは記憶にあります。

大学では国語系の科目は専攻外だったので、一般教養科目として履修するだけでしたが、受験の圧力がない分肩の力が抜けて、国語を純粋に楽しむことができたように思います。今でも印象に残っているのは、伊藤博先生という万葉集の先生のことです。なんと講義のプリントがすべて毛筆で書かれていて、漢字だけで書かれた万葉集の歌の原文に、読みのためのカナが一部にふられていました。先生自身の解説も毛筆で書き加えられていました。

残念ながらそのプリントは失くしてしまいましたが、最近読んだ、大谷雅夫「万葉集に出会う」（岩波新書）に、伊藤先生のプリントに雰囲気似ている「くだり」があったので、少し引用します。（もちろん元は縦書きです）

石激垂見之上乃左和良妣乃毛要出春尔成来鴨

この歌は、天智天皇の子である志貴皇子（しきのみこ）の歌で、万葉集の有力な写本（万葉集の原本は現存しません）の一つである「西本願寺本万葉集」では、この漢字の連続体の横に、

イハソソク タルミノウエノ サワラヒノ モエイズルハルニ ナリニケルカモ

と、カナ（「傍訓」と呼ぶそうです）がふられています。この歌はかなり有名な歌なので、「おやっ？」と思った人もいないではないでしょうか。「イワソソク」ではなく「イワバシル」ではないかと。

「イワバシル」にカナをあらためたのは、江戸時代の国学者である賀茂真淵（かものまぶち）だそうです。時代によってカナが変わるんですね。大谷雅夫さんはこんな素敵な言葉を書いています。

古典とは、それを受け止める時代ごとに違った光をあてられ、異なる
とらえられ方をして、それによって長い命を保つものと言えるであろう。

大伴家持らが万葉集を編集した奈良時代には、日本には固有の文字がなく、当時の話し言葉の音声に、中国の文字＝漢字を充てながら歌を記録していました。漢字にも音・訓読みがあり、またその文字そのものが表す意味があることから、のちに様々に解釈することが可能になっているのです。

さて、平安時代になるとひらがなやカタカナを使用した古典文学作品が多くなりますが、漢字のみの文章もたくさん書かれています。一つは仏教のお経ですね。今もお経は漢字をそ

のまま読みますよね。また、政治の分野での記録や歴史は漢字を連ねて書かれています。そして平安貴族たちの子弟が学ぶ「大学」や、一族ごとの教育機関（藤原氏の勸学院、和氣氏の弘文院など）では、中国の古典や歴史書などの漢文が教えられていました。

この伝統は江戸時代の寺子屋でも絶えることなく続きます。しかし漢字の読みについては、すっかり日本語化しました。私たちが漢文とよんでいるものは、漢字を日本語読みした文章です。私は台湾に行ったときに、街中に書かれた漢字の意味は目でみてなんとなくわかるのに、それを台湾の人に音声にされる（話される）と皆目見当がつかず、また私が漢字を読んでも相手には全く通じなかったことが印象的でした。むしろ韓国で漢字を音声にされたものの方が、日本の漢字読み近く、理解しやすかったです。おかしなものですね。

かつての大学入試に比べて漢文が出題される割合は下がってきていると言われています。それでも漢文の学習が日本の国語教育の中に位置づいているのは、万葉集の時代から延々と続く、他国の文字を自らの言語生活に使うための知恵や工夫が、漢文の学習には詰まっているというところがあるからではないでしょうか。

古文・漢文を勉強するモチベーションは上がりましたか？（`艸`）